

猫と胡瓜

城間 正二 (1898・M31) 字上地 (00 : 44)

なーうれー、うりん大^{うむかし はなし}昔ぬ話^るやさ^にや。
猫^{まや}あど^{でーひ}く代^{んかし}経^{いえーき}たく^{ちゆ}とう。昔^ぬ金^ぬ持^ぬ人^ぬお、主^ぬ
え^{たかうじん}かん^{むの}し高^{むの}御^{むの}膳^{むの}でい^ち、うり^{むの}とう食^{むの}事^{むの}お^うさ^がい^しえ

一。
あん^{むぬ}さ^{とうくる}く^{じゅー}とう、う^{むぬ}ぬ^{とうくる}食^{じゅー}事^{むの}う^{むの}さ^{むの}が^{むの}る^{むの}所^{むの}か^{むの}ら、尻^{むの}尾^{むの}さ^{むの}ぎ^{むの}て^{むの}い、う^{むぬ}ぬ^{むぬ}御^{むぬ}膳^{むぬ}ぬ、主^{むぬ}ぬ^{むぬ}食^{むぬ}事^{むぬ}う^{むぬ}さ^{むぬ}が^{むぬ}る^{むぬ}碗^{むぬ}ん^{むぬ}か^{むぬ}
い、尻^{むの}尾^{むの}し^{むの}て^{むの}い^{むの}よー。あん^{むの}さ^{むの}ぐ^{むの}とう、「かん^{むの}ね^{むの}ー^{むの}る^{むの}者^{むの}
お」でい^ち、叩^たつ^く殺^くち、あん^うし^う埋^うす^うた^うく^うと^うう。

う^{きゅーい}り^{みー}か^{ていー}ら、胡^な瓜^なぬ^な生^なて^ない^なよー、一^なち^な生^なと^な一^なた^なん^なで^な
い。「珍^{ひるま}し^{ひるま}ー^{ひるま}む^{ひるま}ん、う^{まや}ぬ^{まや}猫^うあ^う埋^うす^うて^うー^うし^うが、其^{うんま}処^{うんま}か^{うんま}い^{うんま}
胡^{きゅーい}瓜^{みー}ぬ^{ていー}生^なと^なー^なる」ん^なち。一^なち^な生^なて^ない、な^なー^なむ^なる^な生^なら^な
ん^{ひるま}で^{ひるま}い^{ひるま}よー。珍^{ひるま}さ^{ひるま}し、あ^{ひるま}さ^{ひるま}て^{ひるま}い^{ひるま}見^{ひるま}ち^{ひるま}ゃ^{ひるま}く^{ひるま}と^{ひるま}う^{ひるま}よ、う^{ひるま}
ぬ^{きゅーいぎー}胡^{まや}瓜^{みん}木^{たま}や^{みー}猫^{みー}あ^{みー}目^{みー}玉^{みー}か^{みー}ら^{みー}生^{みー}と^{みー}一^{みー}た^{みー}ん^{みー}で^{みー}い。う^{みー}り^{みー}ん^{みー}
な^かー、う^かり^か食^かみ^かー^かぬ^かー、う^かぬ^か主^かえ^か死^かぬ^かる^かし^かじ^かや^かて^か
一^かん^かて。

あん^なぐ^なと^なう、う^なり^なか^なら^なる^な生^ない^な物^なぬ^な一^なち^な生^ない^な物^なお^な食^な
む^ちし^ちえ^ちー^ちあ^ちら^ちん^ちで^ちい^ちち^ち聞^ちち^ちよ^ちー^ちん^ちり^ちん^ちど^ちー。

【共通語訳】

もう、これも大昔の話でしょうね。

ある家で、猫を長いこと飼っていた。昔、金持ちの家の主人は、高御膳で食事を召し上がるでしょう。

そしたら、食事をなさっている側から、猫が尻尾を振ってね、主人のお碗に尻尾が触れてしまったんだって。すると、主人は怒って、「こんな奴は！」と殺して埋めてしまった。

その後、埋めた所から胡瓜が生えてきて、実が一つついたんだって。「珍しい、猫を埋めた所から胡瓜が生えてきた」と。それには実が一つしかできず他には全くできなかったの、不思議に思い掘ってみた。すると、その胡瓜は猫の目玉から生えていたんだって。その胡瓜を食べていたら、それはもう主人の命はなかったのでしょうね。

そういうことから一つだけ実がついた物は、食べるものではないと聞いているんだよ。